

# 同格語の範疇変化について

羽根田知子

## I

二つの名詞または名詞相当語句 A, B が AB の順で同格表現を成す場合の意味上の規定関係は, A が B を規定するか, B が A を規定するかのどちらかである<sup>1</sup>. 「B という A」という関係にあるならば A が B を規定しており, 「B である A」という関係にあるならば B が A を規定している. 例えば die Hauptstadt Berlin は「ベルリンという首都」という関係にあり, Friedrich der Große は「大王であるフリードリヒ」という関係にある. これらが主語述語関係に立つと, 「B という A」の論理上の主語は B であり, 「B である A」の論理上の主語は A である<sup>2</sup>. 屈折語の初期においては, このような意味上の関係が, 名詞類の同格のみによって表現されることが多かったが, ドイツ語では既に古期において統語的範疇が変化しているものもある. 本稿では「A は B である」という関係を表す, あるいは潜在させている文及び語句について, 位置及び形態の変化と定着の原因を考察するのが目的である.

## II

現代ドイツ語で「A は B である」ことを表す文を, 文型の点で分類すると次のようになる.

- (1) A が主語, B が主格補語としてコプラ (copula) で結ばれる.

Er wird geizig. Er bleibt ein Geizhals.

Die Tür steht offen.

Du siehst jung aus.

助動詞 sein による完了形もここに入れられる.

Ich bin in Deutschland gewesen.

(2) Aが主語, Bが擬似述詞 (quasi-predicative) として現れる. B (イタリック体の部分) がなくても叙述が完結する点で(1)と異なる.

Er saß *verlassen* in der Ecke.

(→ Er saß in der Ecke./Er war verlassen.)

Er starb *jung*.

(3) Aが対格目的語, Bが目的格補語として現れる. 用いられる動詞には, 完全他動詞としての用法もあるが, その場合は意味が異なる.

Er nennt mich seinen treuen Kameraden.

Der Knabe fühlt sich jetzt einen Mann.

Ich fühle mich krank.

Sie glaubte sich allein.

haben 支配動詞の完了形もここに入れられる.

Ich habe den Brief geschriben.

(4) Aが対格目的語, Bが擬似述詞 (イタリック体の部分) として現れる. 動詞が完全他動詞である点で(3)と異なる.

Er steckt den Brief *ungelesen* in die Tasche.

(→ Er steckt den Brief in die Tasche./ Der Brief ist ungelesen.)

受動態で表現されると(2)に入る.

Fische werden bei uns auch *roh* gegessen.

Bは動詞で表される行為の結果生ずる状態を表す場合がある.

Er schlug ihn *tot*.

本来は自動詞であるものが, このパターンで他動詞的に用いられることがある.

Er weinte sich die Augen *rot*.

(5) Aが主語または目的語で現れ, Bは前置詞句で表現される.

Das alles kommt mir wie ein Traum vor.

Er hält mich für einen Chinesen.

Er faßte meine Worte als eine beleidigende Kritik auf.

Ich will keinen Schwächling zu meinem Mann.

Er gibt sich für einen Ausländer.

Das Gericht erwies sich als unrichtig.

Gar oft wird Recht als Unrecht verschrien.

Du giltst für einen seiner besten Freunde.

(1)~(4)で挙げた表現におけるBの扱いについてはさまざまな意見がある。例えばドゥーデン<sup>3</sup>では、Bが形容詞で現れる場合は文成分形容詞(Satzadjektiv)として扱われている。文成分形容詞は、1.主語(Subjekt)、2.目的語(Object)、3.述語(Prädikat)にかかり得るが、どれにかかるとかを形態から判断することはできない。

1. Der Beamte verlangte den Ausweis *zerstreut*.
2. Der Beamte verlangte den Ausweis *aufgeschlagen*.
3. Der Beamte verlangte den Ausweis *laut*.

意味による判断も決定的ではなく、例えば Er hat es leicht gefunden. のような文では、Er hat gefunden, daß es leicht ist. の意味なのか、Es machte ihm keine Schwierigkeit, es zu finden. の意味なのかは、文脈で判断せざるを得ない。

同じくドゥーデンで(1)、(3)においてBが名詞である場合はそれぞれ、同定主格(Gleichsetzungsnominativ)、同定対格(Gleichsetzungsakkusativ)と呼ばれている(Ibid., S. 574ff.).

(1)~(4)で用いた擬似述詞という用語はイエスペルセン(O. Jespersen)によるものである<sup>4</sup>。彼はいわゆる補語の叙述の働きを重視して述詞(predicative)と呼び、述詞または述詞的なものは、その主語に対する関係によって3段階に分けられる。

1. It was *true*./ He looked *anxious*. (述詞)
2. He married *young* and died *poor*. (擬似述詞)
3. There he sat, a *giant among dwarfs*. (外位置)

カーム(G. O. Curme)は主格補語、目的格補語に対して主格叙述語(subjective predicate)、目的格叙述語(objective predicate)という用語を用いている(同上書215ページ以下)。イエスペルセンの擬似述詞、外位置にはほぼ相当するものは叙述同格語と呼ばれ、現代では格語尾を持たない形容詞や分詞についても、歴史的に見てそれらが関係する語と同格であ

った場合は同格語と言われる。

Bに相当する要素の呼び方が定まらないのは、それが意味上は述部でありながら、述部としての機能を担う動詞に依っていないということや、品詞の定義そのものも、何を基準にするかによってまちまちであること等による。その基準としては、意味、機能、形態が考えられる。例えばフリーズ (Charles C. Fries) は、語の位置機能を基準にして、同一の位置に来る語を一つの語類にまとめ、それ以外は機能語として扱っている (同上書 837ページ以下)。形態を基準にした分類には、スウィート (H. Sweet) の品詞分類が挙げられる。そこではまず、変化詞と不変化詞が大別されるが、下位分類は機能を基準にしている。また、いわゆる学校文法の伝統的 8品詞では、意味、機能、形態が混同されている。いずれの品詞分類も一つの基準で貫くには無理があり、名詞の形容詞的用法、副詞の形容詞的用法等に見られるように、品詞間の境界が流動的であるということは、形態、統語、意味上の範疇に 1対1対応の関係がない自然言語の特徴をよく反映していると言える。そしてこのようなずれが互いの通時的な変化にも深く関わっていると思われる。そのことを今回はゲルマン語の中でも屈折度の高い言語であるゴート語を中心に、「AはBである」の関係にある語句を手掛かりに考察する。以下の例文はウルフイラ (Wulfila) によるギリシャ語からのゴート語訳聖書である『ゴート語の聖書』<sup>5</sup>からのものである。常にギリシャ語本文と比較しながら見ていくことにする。

### III

「AはBである」の原初的な表現方法は、名詞類 (Nomen) A, B を並べることである。

got. unte braid daur jah rums wigs sa brigganda in fralustai,  
          B       A           B       A

gr. ὅτι πλατεῖα ἡ πύλη καὶ εὐρύχωρος ἡ ὁδὸς ἡ ἀπάγουσα εἰς τὴν  
          ἀπόλειαν, (Mt. 7-13)

滅びに通じる門は広く、その道も広々として<sup>6</sup>,

形容詞と名詞が並べられた場合、例えば *daur braid* 又は *braid daur* という表現では、形容詞が付加語的に用いられて「広い門」という意味なのか、あるいは述語的に用いられて「門は広い」という意味なのかという問題もあるが、他に述部がなければ AB 又は BA は文として発話されていると見なされる。AB という連続体が統語範疇 S (=文) として現れるならば、A は B と結合して S となるような、逆に B は A と結合して S となるような範疇として現れているはずで、それは NP (=名詞句) と VP (=動詞句) であると考えられる。統語範疇と意味範疇を 1 対 1 に対応させ、どの範疇が他のどの範疇と結合するかを範疇表示自体に示す方法をとる形式意味論の表記法を用いると<sup>7</sup>、AB という連続体は範疇 t の表現で、A は範疇 t/(t/e) [t/e と結合して t となる範疇]、B は範疇 (t/e) [e と結合して t となる範疇]<sup>8</sup>、の表現であると考えられる。AB という並列形式による表現には、それらの範疇の違いが反映されていないが、言語が変化するものならば、その違いが分かりやすくなるように変化するであろう。そのような変化の方向として次の 2 点が考えられる。

1. 位置によって明示する。
2. 語彙または語形態によって明示する。
  - 2-1. NP であることを示す。
  - 2-2. VP であることを示す。

ギリシャ語本文とゴート語翻訳を比べてすぐ目につく違いは冠詞であるが、ギリシャ語の場合は冠詞による NP の明示が発達している。ゴート語の指示代名詞はまだ冠詞には至っていないので、ギリシャ語の冠詞付き名詞はゴート語においてしばしば無冠詞で現れる。従って、ギリシャ語の冠詞がゴート語の指示代名詞で訳されている場合は、ゴート語内の機能によるものか、少なくともゴート語にとって不自然ではない範囲の逐語訳と考えられる。そのあたりを概観してみることにする。

名詞句 NP における主要部としての名詞は、ギリシャ語の場合は定冠詞付き、ゴート語の場合は無冠詞であるのが標準的である。

a) 主語として現れる場合。

got. und þatei usleipiþ himins jah airþa,

gr. *ἕως ἄν παρέλθῃ ὁ οὐρανὸς καὶ ἡ γῆ,* (Mt. 5-18)

天地が消え失せるまで、

b) 動詞の目的語として現れる場合.

got. ...gatairan witōþ aiþþau praufetuns ;

gr. ...καταλῦσαι τὸν νόμον ἢ τοὺς προφῆτας’ (Mt. 5-17)

……律法や預言者を廃止するため、

c) 前置詞の目的語として現れる場合.

got. jah ains ize ni gadriusiþ ana airþa...

gr. *καὶ ἐν ἑξ αὐτῶν οὐ πεσεῖται ἐπὶ τῆν γῆν...* (Mt. 10-29)

だが、その一羽さえ、……地に落ちることはない。

d) 名詞の属格で規定された名詞もゴート語では無冠詞である。

got. saei....., minnista haitada in þiudangardjai himine :

gr. *ὁς..., ἐλάχιστος κληθήσεται ἐν τῇ βασιλείᾳ τῶν οὐρανῶν*’

……は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。 (Mt. 5-19)

NP として現れる名詞に所有表現が加わる場合もギリシャ語では定冠詞が付けられ、ゴート語は無冠詞で現れる。ゴート語においては3人称に限って再帰所有と非再帰所有が区別され、この3人称再帰と1人称、2人称については所有代名詞が用いられ、形容詞の強変化に従う。3人称非再帰の場合は人称代名詞の属格が用いられる<sup>9</sup>。一方、ギリシャ語においては3人称でも再帰、非再帰の区別がなく、共に強意代名詞属格が用いられ、1人称、2人称に関しては人称代名詞の属格が用いられる。以下ではゴート語で所有代名詞が用いられている表現、人称代名詞属格が用いられている表現の順で示すことにする。

a) 主語として現れる場合.

got. swa liuhtjai liuhaþ izwar in andwairþja manne,

gr. *οὕτως λαμψάτω τὸ φῶς ὑμῶν ἔμπροσθεν τῶν ἀνθρώπων,*

(Mt. 5-16)

そのように、あなたがたの光が人々の前で輝くように、

got. afariddjedun imma siponjos is.

gr. ἠκολούθησαν αὐτῷ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ. (Mt. 8-23)

(イエスが船に乗り込まれると)弟子たちも従った。

b) 動詞の目的語として現れる場合。

got. hrazuh saei afletip̃ qen seina,

gr. ὃς ἂν ἀπολύσῃ τὴν γυναῖκα αὐτοῦ, (Mt. 5-32)

妻を離縁する者はだれでも,

got. jabai afletip̃ mannam missadedins ize,

gr. ἐὰν γὰρ ἀφῆτε τοῖς ἀνθρώποις τὰ παραπτώματα αὐτῶν, (Mt. 6-14)

もし人の過ちを赦すなら <直訳：人に彼らの過ちを赦すなら>，

c) 前置詞の目的語として

got. jah urreisands galaiþ in gard seinana.

gr. καὶ ἐγερθεὶς ἀπήλθεν εἰς τὸν οἶκον αὐτοῦ. (Mt. 9-7)

(その人は) 起き上がり, 家に帰っていった。

got. bi akranam ize ufkunnaiþ ins.

gr. ἀπὸ τῶν καρπῶν αὐτῶν ἐπιγνώσαθε αὐτοῦς. (Mt. 7-16)

あなたがたは, その実で彼らを見分ける。

以上のように, NP の主要部としての名詞は, ギリシャ語では冠詞付き, ゴート語では無冠詞で現れるのが一般的であるということを確認した上で, 名詞類 A, B の並列による主述表現に戻ることとする。先の「門は広い」のギリシャ語表現 *πλατεῖα ἡ πύλη* では VP に形容詞が来ていたので, NP と VP の区別は冠詞の有無というよりも, 形容詞の述語的位置<sup>10</sup>によるところが大きいが, 共に名詞である場合は, 冠詞が NP を明示していると思われる。そして相対的には無冠詞が VP を表している。(下線部は VP)

1) gr. καὶ ἐχθροὶ τοῦ ἀνθρώπου οἱ οἰκιακοὶ αὐτοῦ.

got. jah fijands mans innakundai is. (Mt. 10-36)

こうして, 自分の家族の者が敵となる <直訳：人の敵であるのはその家の者である>。

2) gr. ὁ νόμος ἁμαρτία ;

got. witop frawaurhts ist? (R. 7-7)  
律法は罪であらうか。

3) gr. τὸ γὰρ φρόνημα τῆς σαρκὸς θάνατος, τὸ δὲ φρόνημα τοῦ  
πνεύματος ζωὴ καὶ εἰρήνη·

got. aþþan fraþi leikis daupus, iþ fraþi ahmins libains jah  
gawairþi; (R. 8-6)

肉の思いは死であり、靈の思いは、命と平和であります。

1) の *ἐχθροὶ* は形容詞としても用いられるが、ここでは *τοῦ ἀνθρώπου* によって規定されているので名詞である。そして VP に現れた *ἐχθροὶ* は無冠詞であるが、NP に現れた *οἰκτικοὶ* は冠詞付きである。このように、名詞 A, B の片方が冠詞付きの場合は、冠詞付き名詞が NP を、無冠詞名詞の方が VP を形成すると言えるが、同定表現に見られるように、A, B 共に冠詞付きの場合は、VP 性を補助する意味で、いわゆるコプラが用いられる。

4) gr. ὁ λύχνος τοῦ σώματος ἐστίν ὁ ὀφθαλμός.

got. lukarn leikis ist augo (Mt. 6-22)  
体のともし火は目である。

5) gr. οὗτος γὰρ ἐστίν ὁ νόμος καὶ οἱ προφῆται.

got. þata auk ist witop jah praufeteis. (Mt. 7-12)  
これこそ律法と預言者である。

冠詞を持たないゴート語においては A, B が共に無冠詞で現れるので NP の目印はない。それだけに VP を示す動詞の必要性はゴート語における方が、より大きかったのではないかと思われる。例えば 2) のギリシャ語表現では *ἐστίν* が略されているが、ゴート語の方では *ist* が用いられている。

「AはBである」という表現において、論理上の主語が無冠詞、述語が定冠詞で現れることはあり得ない、そもそも「AはBである」ということは、Bによって表される概念の外延の一つがAによって表される概念であることを表す。その判断をするためには、Aによって表される概念が限定

されなければならない。限定されていない概念Aについて、それがBの外延の一つかどうかを判断することはできないからである。そのような限定の暗示として冠詞が用いられる。従って論理上の主語Aが無冠詞、述語Bが定冠詞付きだとしたら、限定されていないAが限定されているBのひとつであるという関係になってしまうので、このような表現はあり得ない。

最後に、A、B共に無冠詞の場合であるが、これは表現としてはあり得るが、冠詞を有する言語においては、文体的に特別な場合を除いて、実際に現れることは少ない。

ここまでは、名詞類A、Bの並列による主述表現について、ギリシャ語では冠詞の有無による NP [=t/(t/e)] と VP [=t/e] の明示が発達していることを確認し、ギリシャ語、ゴート語に関わらず、VP の補助手段としてコプラが用いられることを示唆した。次章では VP の補助手段から VP の主要部に变化する過程を統語範疇との関わりで考察したいとおもう。

#### IV

高度に屈折的な言語において、主語としての人称代名詞は明示や強調以外では現れず、動詞の語尾で済まされるのが普通である。このことを「AはBである」の表現について当てはめると、Aに人称代名詞を置くことで強調的になるが、それを避けるとAに相当する語がなくなり、Aとの対立でBのVP性を表すことはできず必然的に動詞が利用されることになる。といっても、例えば現代ドイツ語でも Wunderbar!, Feuer! 等の一語文もあるように、Bだけでも文として現れる可能性はあるが、これらはまた別種の強調を帯びるので考察の対象から除外する。

6) got. fraiwi Abrahamis sijum jah ni mannhun skalkinodedum  
aiw hvanhun:

gr. σπέρμα Ἀβραάμ ἔσμεν καὶ οὐδενὶ δεδουλεύκαμεν πώποτε

(Jn. 8-33)

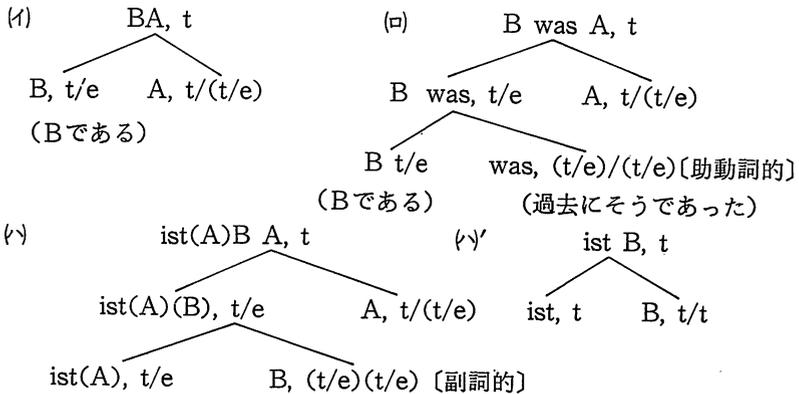
わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。

人称とは別に、「AはBとなる」、「AはBのままである」等、動作態様が問題となる場合や、「AはBである」ことを要求したり仮定したり、過去においてそうであったことを表す場合も動詞が必要となる。

- 7) got. ju sadai sijub, ju gabigai waurþub,  
 gr. ἤδη κεκορησμένοι ἐστέ ἤδη ἐπλουτήσατε (1. K. 4-8)  
 あなたがたは既に満足し、既に大持金ちになっており、
- 8) got. wasuh þan nehva pasxa, so dulþs Judaie.  
 gr. ἦν δὲ ἐγγὺς τὸ πάσχα, ἡ ἑορτὴ τῶν Ἰουδαίων. (Jn. 6-4)  
 ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。
- 9) got. ei sijaiþ niujis daigs,  
 gr. ἵνα ἦτε νέον φύραμα, (1.K. 5-7)  
 (あなたがたが) いつも 新しい 練り粉 のままでいられるように、
- 10) got. jabai nu augo þein ainfaþ ist, allata leik þein liuhadein  
wairþiþ;  
 gr. ἐὰν οὖν ὁ ὀφθαλμὸς σου ἀπλοῦς ᾖ, ὅλον τὸ σῶμά σου φωτεινὸν  
ἔσται (Mt. 6-22)  
 目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい。
- 11) got. unte nist unmahteig guda ainhun waurde.  
 gr. ὅτι οὐκ ἂδυνατήσῃ παρὰ τῷ θεῷ τῶν ῥήμα. (Lk. 1-37)  
 神にできないことは何一つない〈直訳：神には言葉の一つも不可能ではない〉。

これらの表現におけるBと動詞の範疇はどのように定義されるであろうか。B+動詞という連続体がVPとして現れているので、差し当たりBの範疇は、動詞と結合してVP [=t/e] となるような範疇であると考えられる。動詞には他動詞と自動詞があるが、ここでは自動詞であり、自動詞の範疇はt/eと表される。従ってBの範疇は範疇t/eと結合して範疇t/eとなるもの、すなわち(t/e)/(t/e)である。これはいわば副詞である。ところで、同格名詞類A Bの並列による主述表現では、Bは範疇t/eの表現で

あった。こちらから考えればコプラの範疇は t/e ではなくて (t/e)/(t/e) である。これはいわば助動詞である。以上を図に表すと以下ようになる。同格名詞類 AB の並列によるコプラのない主述表現は(イ), コプラが VP の補助手段として現れる場合は(ロ), コプラが VP の主要部として現れる場合は(ハ)である。(ハ)は極度に総合的な言語において、動詞の主語が省略されているのではなく、動詞の中に含まれている状態を仮定している。語順は述部が主語に先行するのが基本と仮定する。



これらの並存に見られるように、ギリシャ語の *eiµi* やゴート語の *wisan* は、コプラと呼べるほどには形式語化されていなかった。語順の変化を除いて範疇だけを問題にすれば、現代ドイツ語において「AはBである」がコプラによって表現される場合は一般に(ハ)の表現として現れるが、*scheinen* を用いると、(ハ)の表現としても(ロ)の表現としても現れ得る。

Er scheint mir der rechte Mann dafür. (ハ)

Er scheint mir, der rechte Mann dafür zu sein. (ロ)

(ハ)におけるBの範疇 (t/e)/(t/e) が副詞的形態で現れるものもあり、Bの前置詞句による表現が挙げられる。

Das alles kommt mir wie ein Traum vor.

Der Wille gilt für die Tat.

ドイツ語では(イ), (ロ), (ハ)の並存状態から次第に(ハ)の表現が優勢になって

いったものと思われる。(i)または(回)と(い)とではBの範疇が異なっている。その形態への反映と思われる現象が、既に古高ドイツ語において見られる、「AはBである」という叙述的用法のBに形容詞や分詞が現れてそれが強変化する場合、名詞型変化形と代名詞型変化形が並存する単数では、ゴート語も古高ドイツ語も主に名詞変化形をとるということでは共通しているが、その名詞性を各々の言語のパラディグマにおいて観察すると、古高ドイツ語の方では相対的に弱まっている。blinds (盲目の) について、主格・単数の曲用を示すと次の表のようになる。

	m.		n.		f.	
	名詞型	代名詞型	名詞型	代名詞型	名詞型	代名詞型
got.	blinds	—————	blind	blindata	blinda	—————
ahd.	blint	blinter	blint	blintaz	blint	blintiu

ゴート語における名詞型変化形は、性によって異っているため、Aの名詞と同格であることが形態的にはっきりしているので、同格名詞類ABの並列による(i)の表現が存在し得た。しかし古高ドイツ語における名詞型変化形は3性に共通している。形態上の類似性から名詞類として扱われていた形容詞、いわゆる形容詞的名詞 (noun adjektive) は、(i), (い)に見られるように、範疇 t/e としても、(t/e)/(t/e) としても現れていたが、名詞型変化形において性の区別を失うことにより、動詞規定語としての場合と名詞規定語としての場合で形態を区別して現れる範疇 (t/e)/(t/e) の形容詞に止揚されるきっかけを見出した。つまり叙述的用法としては無変化、付加語的用法としては格変化する形容詞になりつつあった。しかし付加語的用法に関しては、名詞型変化形と代名詞型変化形がかなり長い間、文体的、方言的バリエーションまで含めると今日まで並存してきた。

これまででは、いわば名詞であった形容詞が形容詞に分化する前段階の状態を中心に、「AはBである」という叙述の面から観察してきたが、次章では「BであるA」という付加語の面から観察したいと思う。

## V

「BであるA」を表現する場合もAB, BAの両方が可能である。まずゴート語のBに強変化形が現れる場合を概観する。

- a) A Bの順で現れる場合。〔 〕内はゴート語の性・数・格である。
- |      |                           |                                |
|------|---------------------------|--------------------------------|
| got. | bagms ubils               | akrana goda                    |
| gr.  | δένδρον σαπρόν (Mt. 7-18) | καρπὸν καλός (Mt. 7-17)        |
|      | 悪い木は〔男・単・主〕               | 良い実を〔中・複・対〕                    |
| got. | waira frodamma            | missadedins izwaros            |
| gr.  | ἄνδρὶ φρονίμῳ (Mt. 7-24)  | τὰ παραπτώματα ὑμῶν (Mt. 6-15) |
|      | 賢い人に〔男・単・与〕               | あなた方の罪を〔女・複・対〕                 |
| got. | sa þiumagus meins         |                                |
| gr.  | ὁ παῖς μου (Mt. 8-8)      |                                |
|      | わたしのしもべは〔男・単・主〕           |                                |
- b) B Aの順で現れる場合。
- |      |   |                           |
|------|---|---------------------------|
| got. | managai motarjos jah frawaurhtai        |                           |
| gr.  | πολλοὶ τελῶναι καὶ ἁμαρτωλοὶ (Mt. 9-10) |                           |
|      | 多くの取税人と罪人らが〔男・複・主〕                      |                           |
| got. | kaldis watins                           | leitil mel                |
| gr.  | ψυχροῦ (Mt. 10-42)                      | μικρὸν χρόνον (Jn. 12-35) |
|      | 冷たい水の〔中・単・属〕                            | しばらくの間〔中・単・主〕             |
| got. | izwaraizos garaihteins                  |                           |
| gr.  | ὑμῶν ἡ δικαιοσύνη (Mt. 5-20)            |                           |
|      | あなた方の正義に関して〔女・単・属〕                      |                           |
| got. | in niujamma seinamma hlaiwa             |                           |
| gr.  | ἐν τῷ καινῷ αὐτοῦ μνημείῳ (Mt. 27-60)   |                           |
|      | 新しい自分の墓に〔中・単・与〕                         |                           |

ゴート語のBが強変化であるこれらの場合には、BはAと同格の名詞類であるのか、形容詞の語尾変化形であるのかは判断し難い。ゴート語における形容詞がまだ名詞的性質を有していたことを考えると、1)の連続体ABは「Aは、Bであるそれは」というような換言的表現で、例えば最初の例の bagms ubils は、「木は、悪いそれは」に近いと思われる。即ち bagms ubils という連続体の統語的レベルは、bagms, ubils と同レベルにあり、格を考慮に入れなければその範疇は t/e のままである。ここでは

AとBのみの関係を問題としたいので、格も含めた範疇については触れないことにする。次に *bagms ubils* という連続体が *bagms* と *ubils* という二つの要素から構成された一要素として見るならば、*ubils*の範疇は *t/e* をとって *t/e* となるもの、すなわち *(t/e)/(t/e)* である。これが形態に反映されると *ubils* は名詞Aに従って語尾変化する形容詞であって、もはや名詞ではない。2) の連続体BAにおけるBはこれに近いと思われる。ゴート語の語順はギリシャ語の語順に依っているので、ゴート語としてはどちらの表現法が優勢であったかは分からない。しかし、ギリシャ語の語順に対応し得たということは、少なくとも両方の表現法が並存していたということをも物語っている。ギリシャ語の冠詞や所有表現に対してもそうであったように、ゴート語の構造から逸脱する逐語訳は避けられたであろう。

次にBに弱変化形容詞が現れる場合を概観する。

a)' AB の順で現れる場合。同格的と考えてA : B と記すことにする。

got. *in riqis : þata hindumisto*

gr. *εἰς τὸ ἀκότες τὸ ἐξώτερον* (Mt. 8-12)

闇の中へ : 最も外のそれへ

got. *gup : þana gibandan waldufni swaleikata mannam*

gr. *τὸν θεὸν τὸν δόντα ἐξουσίαν ποιᾶν τοῖς ἀνθρώποις* (Mt. 9-8)

神を : そのような能力を人々に与えるそれを

got. *augo þein : þata taihswo*

gr. *ὁ ὀφθαλμός σου ὁ δεξιός* (Mt. 5-29)

あなたの目が : 右のそれが

b)' BA の順で現れる場合。

got. *þis mikilins þiudanis*

gr. *τοῦ μεγάλου βασιλέως* (Mt. 5-35)

偉大な王の

got. *ip sa ubila bagms*

gr. *τὸ δὲ σαπρὸν δένδρον* (Mt. 7-17)

そして悪い木は

got. *taihswo þeina handus*

gr. ἡ δεξιὰ σου χεῖρ (Mt. 5-30)

右のあなたの手が

弱変化形容詞は主にAの概念が既に述べられていたり、Aの概念に対応するもののうちのどれであるかが規定される場合に用いられるので指示代名詞と共に現れることが多い。その場合、a)'のように AB の順で現れる時はBの方に指示代名詞が用いられている。ゴート語の指示代名詞がギリシャ語の冠詞の逐語訳でないことは既に確認したので、指示代名詞に関してはゴート語としての必要性から用いられていると考えられる。その必要性とはこの場合、Aに対して統語的に同レベルな同格名詞であるということの明示ではないかと思われる。ただし強変化形と弱変化形の形態のみから、前者は他にそのような明示手段を必要としないが後者はそれを必要とするとは判断できない。というのは、例えば「どのような」が問題になっていて「悪い木は」を表現するならば強変化形が用いられて bagms ubils または ubils bagms となり、強変化形と指示代名詞が同時に現れることは意味的に不可能で、強変化という形態自身による他、同格の明示手段をもたない。一方「どの」が問題になっていて「(今述べたその)悪い木」や「(良い木に対して)悪い木の方は」を表現するならば弱変化形が用いられ、同時に指示代名詞が用いられるのである。その場合、sa ubila bagms は bagms sa ubila とともに表現されるが sa bagms ubila とは表現されないことが問題である。弱変化形の場合は意味的に指示代名詞も必要とする場合が多く、それが同時に同格の明示手段にも用いられたと考える。指示代名詞のこのような働きは、Bに副詞句が現れる場合にも利用される。

got. liuhap: þata in þus

gr. τὸ φῶς τὸ ἐν σοί (Mt. 6-23)

光りが：あなたの中にあるそれが (=あなたの中にある光りが)

got. attan izwarana: þana in himinam

gr. τὸν πατέρα ὑμῶν τὸν ἐν τοῖς οὐρανοῖς (Mt. 5-16)

あなたがたの父を：天にいるそれを (あなたがたの天の父を)

以上から「BであるA」を表現する連続体 AB における形容詞 B は A と同格の名詞類であり、BA における B は形容詞の語尾変化形であると考えられる。

古高ドイツ語において形容詞の範疇が (t/e)/(t/e) として定着し始めていることは、述語的用法に関しての考察で確認したが、語順に目を向けると、換言的な同格表現は名詞に限られ、付加語的形容詞は規定される名詞の前に置かれる傾向にある<sup>11</sup>。そして名詞の後ろに位置する場合は名詞型変化形が優勢となる。このことと、名詞の前に位置する付加語的形容詞は名詞型変化形でも代名詞型変化形でもあり得るということから、叙述的用法と付加語的用法の明示手段は徐々に形態から位置へ移っていったことが分かる。そして付加語的形容詞の前置が定まることにより、後置された形容詞は付加語ではない、つまり述語である可能性を残すことになった。これが I-(1), (4) で見たような表現を可能にしている。

#### 注

- 1 関口存男『冠詞』第一巻、定冠詞篇、1978年、三修社、4ページ参照。
- 2 同上書、第二巻、不定冠詞篇、250ページ以下参照。
- 3 Duden : *Die Grammatik*, Mannheim, 1984, S. 581ff.
- 4 大塚高信監修『新英語学辞典』1982年、研究社、933ページ及び997ページ。
- 5 Streitberg, Wilhelm (hrsg.): *Die gotische Bibel, 1. Teil: Der gotische Text und seine griechische Vorlage, mit Einleitung, Lesearten und Quellenachweisen sowie den kleineren Denkmälern als Anhang*. Heidelberg 1908, 2. Teil: *Gotisch-griechisch-deutsches Wörterbuch*, Heidelberg 1910.
- 6 日本語訳は主に『聖書』新共同訳、1987年、日本聖書協会を参照した。
- 7 『モンタギュー意味論入門』井口省吾訳、1987年、三修社、198ページ以下。
- 8 範疇 e の意味的対象物は個体 (entity), 範疇 t の意味的対象物は真理値 (truth value) である。自動詞も普通名詞も t/e で表されるのは、例えば自動詞 *singen* の意味的対象物は、歌っている者の集合であるので、ある個体について、それが歌っているかいないか、つまりその個体はその集合に属さないかを決定できるからである。
- 9 千種真一『ゴート語の聖書』1989年、大学書林38ページ。Streitberg, Wilhelm: *Gotische Syntax*, Heidelberg 1981. Nachdruck d. *Syntaxteils* d. 5. und 6.

- Aufl. des *Gotischen Elementarbuches*, 1920. S. 30ff.
- 10 田中美知太郎他『ギリシャ語入門』改定版, 1978年, 岩波29ページ。
  - 11 Dal, Ingerid: *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*, Tübingen 1966, S. 62ff.

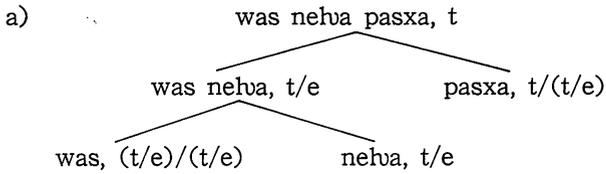
## Umkategorisierung von appositionellen Nomina

Chiko HANEDA

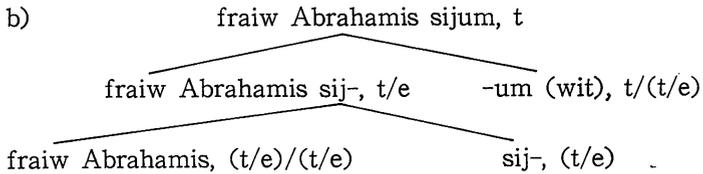
In dieser Abhandlung habe ich die Umkategorisierungsprozesse von appositionellen Nomina in der älteren Sprache anhand der gotischen Bibel im Hinblick darauf betrachtet, wie ihren morphologischen und syntaktischen Veränderungen auch die semantische Kategorie eine Rolle spielt.

Zwei parataktisch gefügte Substantive A und B haben zwei Arten semantischer Strukturen: A bestimmt B oder B bestimmt A. Zum Beispiel wird in der Substantivgruppe *die Hauptstadt Berlin* B (Berlin) semantisch (nicht syntaktisch) von A (Hauptstadt) bestimmt, in *Friedrich der Große* dagegen A (Friedrich) von B (großer König). Wenn A und B in die Relation Subjekt und Prädikat gesetzt werden, gilt B im ersten Fall als logisches Subjekt und A als logisches Prädikat. Im zweiten Fall wird dieses Verhältnis umgekehrt.

In den alten flektierenden Sprachen ist im allgemeinen die Relation „A ist B“ nur durch Nebeneinanderstellung von zwei Nomen auszudrücken, also in Sätzen ohne Kopula. Noch heute bildet man zwar oft verblose Sätze, jedoch sind diese als Ellipsen anzusehen. In den alten Sprachen erscheint dieses B nicht als Ergänzung, sondern als VP und bildet mit A als NP einen Satz. Ein sogenanntes kopulatives Verb tritt nur dann auf, wenn es in Hinsicht auf Tempus, Aktionsart, Modalität, Negation usw. benötigt wird. Dabei könnte hier Typ (t/e)/(t/e) vorausgesetzt werden. Zum Beispiel wird die Struktur des gotischen Satzes *was nehva pasxa* (wörtlich: war nahe Osterfest) wie folgt dargestellt:



Andererseits gehören die Sätze ohne Subjekt zu den gewöhnlichsten Erscheinungen der älteren Sprachen. In dieser Hinsicht wird wiederum ein Verb benötigt. Dieses Verb steht aber anders als in der Struktur a) im Typ t/e, wobei für B Typ (t/e)/(t/e) anzunehmen ist. Zum Beispiel wird die Struktur des Satzes *fraiw Abrahamis sijum* (wörtlich: Nachkommen Abrahams sind [wir]) wie folgt dargestellt:



In der modernen deutschen Sprache erscheinen im allgemeinen als Typ (t/e)/(t/e) Hilfsverb und Adverb, wobei die Kopula im Typ t/e steht. Es liegt hier die Vermutung nahe, daß das Nebeneinander von a) und b) in der älteren deutschen Sprache in den Hintergrund tritt und die Struktur von b) durch vermehrte Sätze mit Kopula die Oberhand gewinnt.